

# （伝承技術に新しい時代の感覚を取り入れる家具製作のプロ集団）唯一無一の独自スタイルを追求

株式会社小見山家具製作所は建築に合わせた家具の施工、インテリアに合わせたテーブルやイスをコーディネート、販売している会社です。昭和六年の創業以来、変わりゆく時代の中で数々の挑戦を繰り返し、進化を繋ねながら、唯一無二の家具を作っています。今回は、現在三代目である小見山与志夫さんに進化し続ける家具屋としての矜持を伺いました。

## 継往开来

—継承・発展 未来を切り開く—

株式会社小見山家具製作所 代表取締役社長 小見山 与志夫さん



### 「カッコイイ」を追求した家具を

「例えようが納めた家具を見た方が『これ、どこで作ったの。どこで手に入れたの』と聞かれ、オーナーがその家具のカッコ良さを自慢出来る、そんな家具を作り続けることが出来たら嬉しいですよね」

そう語るのは、小見山与志夫さん。小見山家具製作所の一番の強みは、お客様が望む『このような感じの家具』といった想いを形にできることです。漠然と思い描く理想を丁寧に読み取り、イメージ化し、それを基に製作図面を起こし、施工までを一元管理していきます。

しかし、ここにたどり着くまでには、祖父、父、そして与志夫さんの三代それぞれの挑戦がありました。

初代小見山信吉さんは小さな工場で一人、木を使って学校用の机や椅子を作っていました。頑固な人で正に「職人」。それ故に仕事に対する姿勢と技術が信頼され、お客様だけでなく、信吉さんを慕つて徐々に多くの職人が集まるようになりました。小さかつた工場はいつしか三階建ての工場を建てるまでになりました。

二代目の信吾さんは、高度成長期の真っ只中。与志夫さんは、今年八十四歳になる父の信吾さんについてから後を繼ぐことを決心しました

与志夫さんは、企業に入る前はテレビ業界で働いていました。家具業界に関しては全くの素人でしたが、生まれ育った環境はいつも「家具づくり」に囲まれていました。「住まいと会社が同じ建物の中についたので、身近には感じていましたが、自分が家具屋になるとは全く考えていませんでした。しかし、いつかは何かで自分の会社を興したいと思っていたことと、何より小さい頃から慣れ親しんだ企業を自分の代で終わらせてよいのか、との想いから後を繼ぐことを決心しました」

与志夫さんは一社員から始め、基礎から知識やテクニックを学びました。二十九歳の時でした。

### 企業は人なり

社長に就任したのは三十九歳の時。バブル崩壊の傷跡が残る時代でした。

「社員として働いているときは知りませんでしたが、社長に就任した時、直面する財務状況に唖然としました。長く続く企業は、大小問わず経営に苦しむ時期があると思いますが、自分の場合は継いだ時が一番苦しかったです」

もがき苦しむ中、改めて企業を分析しました。どこをコストカットすべきか、どこで売り上げたら良いか、どういった戦略で、何を販売していくか。経営者の立場として自分の会社を見たときに確信したことは、会社が今の時代に合っていない方向に進んでいるのではないかということでした。

「家具屋はハイテク産業ならぬローテク産業です。そのため、時代に置いてきぼりにされやすいと感じています」

企業として取り残されないために戦略、戦術が必要であると感じ、独自のスタイルを進化させることに注力しました。父が残してくれた仕入先や販売網がありました。そこに、

こう語ります。

「父は仕事でも何でも新しいものが大変好きな人でした。初代の祖父とは正反対な性格で、商売の嗅覚に優れ、交友関係も広く、家具を作るより売る方が好き。正に『商人』でした」

昭和三十年、四十年代は婚礼家具が飛ぶように売れた時代。更に民間企業や官公庁の事業に携わるなど、幅広く手掛けるようになりました。

しかし、すべてが順調とはいきませんでした。

「残念ながら、モノづくりを得手としない父の経営方針により、営業色が強まり腕の良い職人たちがどんどん離れていました」

### 同じ道を行くな、好きにやれ

これが、三代目の与志夫さんへの、祖父そして父からのお教えでした。これまで先代たちがやってきたことを「踏襲しない」というこの言葉には、時代を「読むこと」が何より大切だという考え方がありました。

「祖父の代も父の代も物を作れば売れた時代。しかし、求められる家具は時代とともに変化しています。家具屋も時代と共に形態を変えていかないと生き残れないと考

えていました」

人が欲しがる家具を形に出来る「人」がいてくれたら新しい「家具屋」に生まれ変えられます。

「後は行くだけです。自分は方向を決めればよい、やりきる覚悟をしっかりと固めました。人は財産です。自分にないものを持つています。若い社員は新しい感覚でデザインセンスも優れています。父の代から残ってくれた職人は昔ながらの作り方を知っています。熟練の力と若い感覚の融合により、設計図からこのように作りたいといふ希望を形にした、うちにしか出来ない家具を作ることが出来るのです」

祖父と父が育ててきた家具屋はその時代に合わせた家具屋として与志夫さんに繋げてくれました。

与志夫さんの「家具屋」は柔軟な発想と伝承された技術を大切に進化し続けることをコンセプトにしています。それはつまり、その時代の社会に必要とされる企業であり続けることです。

「百周年を迎えるのにあと七年あります。ゴールに向かって最終目標が定まりました。百周年までは自分が頑張りたいと思っています。もちろん、百年を迎えることも大事ですが、それより大事なことは変遷の歴史を誇りに思うことです。次の世代は誰かが意志を継いでくれたらいいな、と思います。その時は、その時代に合ったものが今の時代とは変わっているでしょう。もしかするとその形は今とは全然違う業態に進化しているかもしれませんね」

現在五十九才となった与志夫さんは、今が一番楽しいと語ります。

「他ではできない家具、デジタル要素のある家具にも取り組んでいます。きっとカッコイイ家具になると思います」

進化し続ける家具屋は創業百年を目指します。